

研究

橋門韻語 (一)

資料提供

鶴野博文

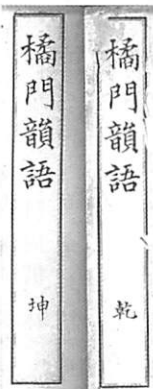
解説 佐藤 巧

はじめに

秋月橋門が明治新政府に徴されるは百年前、八代藩主高標公が、藩校「四教堂」に相次いで藩の財政を傾けてまで「佐伯文庫」を創設したことが佐伯藩の文教隆盛と人材育成の一大契機となった。

先ず、明石秋室が、小藩とはいえ八万冊の蔵書を誇る書物奉行を望んで杵築藩より佐伯藩に移籍、四教堂の教授も兼ね、中島子玉らを育て広瀬淡窓の咸宜園に入門させている。

ここで宜園第一の秀才と言われた子玉は橋門と同窓生となつて親交が始まり、咸宜園、佐伯藩、及び他藩の秀才(例えば賀来飛霞)等の素晴らしいネットワークの基礎が成立した。



橋門先生傳 佐伯 谷 永祚撰  
先生諱龍守伯起秋月氏以字行世劉高祖父西信忠與其兄弟宗家高錫俱共過覽全國後覽白鳥運兄復往西信君不肖貶躬野以終至考道遠矣慨然有興家之志使諸子學書皆劍先生其第二子也年甫十六赴塾後日學於淡由廣瀬氏之門負甚備書自繪縣令監谷某聞其有才而竊欲以爲侍史俊其師致意先生辭曰龍之所以學者志盡在為人校字且縣令何為者某聞之怒命逐之時天大雷而先生意氣益壯飄然收劍來我佐伯寓中斷子玉密後潛入日奉師教遊藝前從昭陽菴并氏而學年二十三如肥前善原下惟教授既而遊備前學塾者三年去遊三郡名

「橋門韻語」は、明治十六年に出版され付随して彼の主な関係者の文書も掲載されているが、今回は次の順で紹介する。※下段（ ）は著者名。

- ① 「橋門先生伝」 経歴や人柄など (谷 永祚)
- ② 「日田紀行」 淡窓への謝恩再訪問 (秋月橋門)
- ③ 「橋門韻語序文」 橋門の詩の評論 (長 三州)

① 橋門先生伝 佐伯 谷永祚撰

【原漢文読みくだし文】

先生、諱(生前の名前)は龍、字は伯起、秋月氏、字を以て行(もち)。姓は劉、高祖父西信君、其の兄と宗家高鍋公に事(つか)えしが、共に讒(ざん)に遇(あ)い国を去る。

後、冤(みん)罪白にして召喚され兄は復た仕えるも西信君焉(こゝろいさまよし)を辱(はづ)とせず、躬耕(きんこう)して以て終わる。

考(父)逍遙(しやうよう)君に至るや、慨然(がいぜん)家を興すの志在り、諸子をして書を学ばしむること劍の若し。先生(橋門)其の第二子なり。年甫十六、豊後日田に赴き淡窓広瀬氏の門に学ぶ。貧しきこと甚だしく傭書(ようしよ) (筆耕) して自ら給す。

県令(郡代) 塩谷某(大四郎正義)、其の才有りて窮するを聞きて、以て侍史(秘書)と為さんと欲して其の師(淡窓)をして意を致さしむ。

先生(橋門)辞して曰わく「龍の学ぶ所以は、志、豈(人に役せ為るるに在らん乎、且た県令何為る者ぞ」と。県令某これを聞き怒りて之を逐うことを命ず。

時に天、大雪なり。而して先生意氣益々(壯)にして飄然として、仗劍、我が佐伯に來たり中島子玉の家に寓す。復(日田)に潜入、師の教えを奉じて筑前に遊(学)び昭陽龜井氏に従いて学ぶ。年二十三。肥前島原に如き、帷を下ろし(開塾)て教授す。既にして備前に遊

び医者(に)学ぶこと三年、去つて三都(京、大坂、江戸)に遊ぶ、名は一時に高し。帰国(し)開業、業大いに售(流行り)延岡内藤公(これに)饋(扶持)を贈る。然れども先生、医を以て(名聲を得る)を欲せざる也。

會、我が泰雲公(十一代高泰)に(招)聘(され)藩文学に任せらる。

その子弟を教うるに諄々として法あり、小過も寬(ゆるす)せざりしが、衆、皆焉(畏愛)す。公(高泰)

薨り、温良公（高謙）嗣立し侍講を任せらる。塞諤<sup>せんがく</sup>忌諱<sup>きぎん</sup>を避けず。（塞諤<sup>せんがく</sup>直言<sup>ちくごん</sup>、忌諱<sup>きぎん</sup>遠慮<sup>えんりょ</sup>）

明治元年、参河県知事として徴<sup>め</sup>（士）さるるも未だ赴任せざるに、更に鎮将府（鎮守府）参辯事、十二月知葛飾県に属<sup>ま</sup>（任）せらる。

時に年六十、政は繁苛<sup>まつりごと</sup>を除き民物を愛養し、俸禄の余り悉く郷党親戚の貧者および少時恩を受くる家に頒つ。三年正月老を以て致仕、囊<sup>のぶ</sup>（金袋）遺財無しと云う。

先生、為人嚴毅、美なる髭髯<sup>しゆぜん</sup>、眉目軒爽、音頭朗暢、見る者、肅然として敬を起さざる莫し。父母に事えて考、備<sup>すべ</sup>て至り、家を治むること嚴、而るに平居は和易、喜笑以て楽しむ。晩年、仏理に深く心を潜め、尤も殺生を戒む。藩廢され、東京牛込外に家（住）し、諸名流と遊び、詩酒徵逐<sup>ちようちく</sup>、絶えて世事を言わず、著書多種あり、家に蔵す。

十三年四月二十六日病没、寿七十二。

永祚曰く、予、尚識り及びしことは、逍遙（君）太翁、為人、慷慨にして、大節あり弓刀に長じ、傍ら琴瑟国詩（和歌）に及ぶ。

故葛飾縣知事

秋月橋贈先生碑

故葛飾県知事 秋月橋門先生の碑（養賢寺境内）



秋月家と谷家（明治四年頃・佐伯藩時代屋敷図）

蓋し先生の業、太翁薫陶の致す所ならん。然れども先生の志操卓越に非らざる自りは、禍福得喪、動ずる所を為さず。亦、安んぞ能く是に至らんや。日田に在りては殆ど饑寒に瀕す、しかるに以て此を易えず。蓋し、新井白石の婚を辞すことと一揆に出ずる者也。令嗣、士新、其の家を克し世を濟く、それ美と謂うべし。予、少小にして先生に業を受け、今聞く所を叙し姑ずこれを次第（由来）とす。

【要旨と解説・語注】

橋門の祖父の西信君は、讒言による冤罪が晴れ、再士官を許されたにもかかわらず、それを蹴って自ら耕作の生活に入り、父の逍遙君は家の再興を決意、子供達に剣術の修行のように厳しく学問修行をさせた。これらが橋門の叛骨不屈の精神を培ったと考えられる。

天保二年（一八三一）は咸宜園では塩谷郡代の塾介入を「官府の難」といって淡窓の弟、旭荘も被害を受けているが、かれらには却って更なる発展の契機ともなり、橋門は修行の幅と交友の深みを大いに増加し、昨年大分合同新聞にも大きく取り上げられた賀来飛



晩年の秋月橋門

明治4年（1871）漢詩結社「玉川吟社」を結成。  
社主：秋月橋門・長梅外  
長三州・秋月新太郎・小栗憲一・松本白華など咸宜園出身者が多く居た。



長三州画「玉川吟館図」より

（東京神田神保町・明治13年2月）

霞など、橋門の要請により、幕末佐伯藩の大砲鑄造に協力までしている。

明治新政府は「徴士<sup>ちようし</sup>」と言って、各藩から有能な藩士を太政官に召し出し仕官させた。橋門は六十歳ながら第一号となり続く若い後輩達の指標、模範となった。

中島子玉の実家に寓居ほぼ三年(史談一六三号石川正雄)、は九歳年下の橋門との家族ぐるみの深い親交を示す。

○谷謹一郎(永祚) 橋門の愛弟子で、嘉永元年(一八四八)佐伯藩士谷万年(佐伯藩権大属、岡山県大書記官)の長男として生まれ、七才で四教堂に入り十才より秋月橋門に師事し漢学を学ぶ。名は士徳、号は朝軒。明治二年橋門に随従して上京、同四年明治政府に出仕(二十三才)大蔵省で活躍、松方正義に抜擢される。

○徴逐 招いたりまねかれたり親しく往来する事、ここでは詩酒が上にあるので酒を飲みながら詩について語り合い親しく交友すること。



東京都大田区真光寺にある「橋門先生の墓」と「無尽蔵」の扁額(明治12年)

谷謹一郎夫婦の墓もここにある。「好生軒釈浩然居士・幽蘭室釈妙香大姉」

○新井白石婚を辞す 河村瑞賢の孫娘と三千両の土付きの結婚を学者の誇りをもって断つたこと。(瑞賢は伊勢平民出身、明暦の大火で一躍大富豪、東回り西回りの航路の開発で権勢家)

○一揆 揆を一(いつ)にす。仕方や方法は同じ。

○自非…先生志操堅固 もし…：なかつたら、という仮定の構文で、…があつたればこそという強調の意をふくんでいる。(日田紀行にも同じ構文あり)

## ②日田紀行 秋月橋門

### 【漢文読み下し文】

予、広瀬先生を辞して後、東西棲棲(忙)、衣食に奔走す。而るに一日も安んずる能わず。是を以て往きて見るを得ざること久し。

弘化乙巳(一八四五)本藩(毛利)に積褐す。諸執事の明と朋友の(推)薦(せん)に由ると雖も先生(淡窓)薫陶の徳を蒙るに非らざる自りは、豈(あに)どうして今日有るを得ん哉。礼に於いて、宜しく往きて恩を謝すべきなり。而るに人臣(臣下)の義、妄りに境を超すを

得ず。再再(のびのび)又数(多)年を歴す。

今茲(今年)嘉永紀元戊申(一八四八年)四月、日田府尹(官)新たに江都自り至り、西の諸侯各々使を遣わし聘を致す。

予乃ち情実を陳べ、この使為らんことを請いて充許され、六月朔、途に上り五日、日田に至り、九日日田を發し十三日に歸して反命せり。

道上、得し所の詩は十余首なり。零碎齷齪、觀るに足る無しと雖も、聊か以て道路経し所、懐旧の意とも記す。

### 【要言と解説・語注】

橋門が日田から逐われて十七年後、再び懐かしい日田を訪れることができた一つは、佐伯藩に

○積褐 即ち、褐(粗末な着物)を積い(脱ぐ)て仕官することで、身分が安定したこと。

○朋友の薦 中島子玉や高妻芳州など。

○自非蒙先生薫陶の徳 先生薫陶の徳を蒙るにあらざれば、もし淡窓先生の薫陶を受ける事がなかつたら。

○致聘 聘を致す。日田代官は十五万石相当の地位と見なされ、九州の目付、日田金の後ろ楯でもあるので各藩は争って使者を立て機嫌を伺う必要があつた。前回は天保四年（一八三三）塩谷代官の開発新田検分に幕府高官（勘定役）が日田に

来た際は佐伯藩重役小林七郎左衛門が聘使で（介副）中島子玉）あつたことから楯門が佐伯藩最重職の一人として恩師淡窓先生共々錦の衣に感激したに違いない。

○零碎齷齪 はんぱな。こせこせした。

### ◎日田への道中詩（有名知人の短評付）

発下直見邨（下直見邨を発つ）

輿中夢断思依依 輿中夢断えて依依たり

手自焚香観化機 自ら香を焚き化機を見る

一縷篆煙困不散 一縷の篆煙困りて散ぜず

渡溪初作白雲飛 溪を渡り初めて白雲となりて飛ぶ

※短評 中村敬宇

「清新なり未だ人、之の道を経ざるなり。」



【大意】 駕籠の中で夢も断え、頼りない思いである。そこで香を焚いて煙りが変化する様を観ると、一筋の篆字模様の煙は集まって、散らずに溪を渡って、初めて白雲（神仙）となって昇っていった。

### 【語注】

○依依 頼りない。

○篆煙 篆字の煙。篆字のごとくうねりて立つ香炉のけむり。

○白雲 作者が理想とした境地や世界を象徴する。楯門が影響を受けたと思われる王維（摩詰）も深く仏教に帰依、好んで「白雲」を詩に用いた。

○中村敬宇 『日本詠史集』声教社に彼の漢詩と略歴が載っている。「敬宇名は正直、敬輔と称し、敬宇は号。」

江戸の人、天保三年（一八三二）生まれ、漢学蘭学を修め、將軍上洛中侍講を命ぜらる。のち英国留學、大藏省翻譯御用、東京大学教授、元老院議員、女子高等師範学校長など歴任、明治の碩学といわれる。」  
 因みに橋門は「橋門、名は龍、字は白起、豊後佐伯の人、東京に住す、宜園の社中なり」と紹介している。橋門は上京後、彼を識り、咸宜園出身者ら共々交遊があつたと推察される。橋門より二十三歳年下。

### 花立嶺

纒過絶澗又層嶺 かろう ぜつかん 纒じて絶澗を過ぎれば又層嶺  
 一任興丁屢息肩 いちにのきうてい、しほしば 一任の興丁、屢々肩を息む  
 巖化蒼苔成卷柏 いわお、そうたい 巖は蒼苔と化し卷柏を成し  
 樹揮積雨作重泉 じゆうせきあめ 樹は積雨を揮つて重泉を作す

※短評 広瀬淡窓

「淡窓曰、唯摩詰一聯為一句、更奇確。」

【大意】 凄い絶壁の谷間をやっと通り過ぎたとおもつたら、今度は幾重にも重なった高い嶺に出くわし



た。すべて駕籠担ぎまかせだが、彼らもしばしば肩を休めなければ進めない。周りの岩はすべて苔で覆われ、イワヒバが生えている。ここ（花立嶺）の木々に降りそそぐ雨は、やがて深い泉となるだろう。

※短評 広瀬淡窓「この詩は、王摩詰（王維）の一聯（十四字）の詩を一句に縮めて表現できていて、確かに興味深い。」

峻山幾疊多於地 しゆんざん いくじよう 峻山 幾疊地よりも多し  
 峭阪千盤欲上天 しやうはん せんばん 峭阪 千盤天に上るを欲す  
 不效古人嘗叱馭 きかす 不效古人嘗て馭を叱るを  
 半眠思旬日如年 せんみん 半眠して旬を思えば日は年の如し



【大意】峻しい山が幾重にも重なり、平地の方が少ない。峭しい岩盤の坂は天まで続きそうだ。でも、このようなとき、馭者（輿丁達）を叱るなど聞いたことのないので、半ば眠りながら句でも考えようとするが、まるで一日が一年のように長く思える。

《補説》

◆「花立嶺」は三国峠（小野市側）に近接の難所で、現行の地図に載ってなく、明治初期の日本陸軍作成の地図にあったが、読み方は不明。

だが、これにより橋門が、現代の宇目町を経て、国境の難所を、漢詩を詠みながら三国峠を越えて三重町に出た事がわかった。



花立嶺